

「中尾家本伊勢物語絵本」に見られる『伊勢物語』享受の様相

武 藤 春 陽

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 『伊勢物語』の世界を描いた伊勢物語絵は数多く描かれてきたが、描かれる場面は特定の章段に偏っている。その中で室町時代後期の制作とされる「中尾家本伊勢物語絵本」（以下、中尾家本とする）は、『伊勢物語』全 125 段のほぼすべてに挿絵をつけ、絵の中に短い注記を書き込んでいるという特徴を持つ。これらの特徴は、先行絵巻では描かれなかった章段の享受を含む中尾家本の作者の理解を明らかにする大きな手がかりとなるが、先行研究では詳しい検討はなされていない。そこで、中尾家本の挿絵や人名注記を 13 種の『伊勢物語』古注釈と比較した結果、中尾家本は先行研究で指摘されていなかった章段においても冷泉家流古注に一致し、概ね冷泉家流古注に基づいて制作されていることがわかった。また、冷泉家流古注以外の注釈書と一致する章段も一部には見られたが、偶然の一致とも考えられるため、つながりがあるとまでは言えない。一方、中尾家本には注釈書と異なる特異な理解を示す章段も見られたが、これらは作者が本文中の語彙を表面的に受け取って絵画化したことによると考察した。

このように、中尾家本には注釈書に基づく章段とそうでない章段が併存する。それは、作者が手持ちの伊勢物語写本に書き込まれた注を参照する一方、注が載っていない章段については独自に本文を読解して制作したためだと考えられる。そして、その独自の理解は表面的なものであり、恣意的で勝手な注記も見られるため、中尾家本の作者は高度な古典的知識を有した人物ではないと結論づけた。

1. はじめに

『伊勢物語』の世界を描いた伊勢物語絵は数多く生み出されてきたが、描かれる場面は特定の章段に偏っている。その中で室町時代後期の書写と見られる「中尾家本伊勢物語絵本」¹⁾（以下、中尾家本とする）は、『伊勢物語』全 125 段のほぼすべてに挿絵をつけ、絵の中に短い注記を書き込んでいるという特徴を持つ。これらの特徴は、先行絵巻では描かれなかった章段を含む中尾家本の作者の理解を明らかにする大きな手がかりとなる。このように、伊勢物語絵からは当時の人々の『伊勢物語』享受のあり方を知ることができる。そし

てもう一つ、『伊勢物語』の享受を示すものとして注釈書が挙げられる。絵と同様に、『伊勢物語』の注釈書もまた数多く生み出されてきた。こうした絵と注釈書はどちらも当時の『伊勢物語』享受のあり方を伝えるものであるとともに、絵を描く際には注釈書が参照された可能性があることから、石川透氏が言うように「注釈をするという行為と、絵画を作るという行為は、非常に関わっている」²⁾のである。そこで本研究では、中尾家本の挿絵の図様や人名注記を『伊勢物語』の古注釈書³⁾と比較し関連性を検討することで、中尾家本の作者はどのように『伊勢物語』を享受し、絵画化したかを明らかにする。

なお、本論文の最後には資料編として本文中で

指摘した図をまとめて掲載した。適宜、ご参照いただきたい。

2. 注釈書とつながる中尾家本の挿絵

まず、中尾家本と注釈書が一致する章段として12段が挙げられる。その内容は、男が人の娘を盗んで武蔵野へ連れていくが、隠れていた草むらに火がつけられそうになって女が歌を詠んだため、女は取り戻されてしまうというものである。

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、
武蔵野へ率てゆくほどに、ぬすびとなりければ、
国の守にからめられにけり、女をば草むらのなかに置きて、
逃げにけり。道来人、「この野はぬすびとあなり」とて、
火つけむとす。女わびて、

武蔵野は今日のはな焼きそ若草のつまもこもれり
われもこもれり

とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。（『伊勢物語』12段^{4）}）

この章段を中尾家本に先行して絵画化した「小野家本伊勢物語絵巻」では、寄り添った男女が草の中に身を隠す様子が描かれている（図1）。また、「異本伊勢物語絵巻」なども同様の構図となっており、先行絵巻の図様は似通っている。一方、中尾家本の挿絵では男女が寄り添っている点はそれらと同じであるが、二人が草ではなく、地面が盛り上がった場所に身を隠している点が注目される（図2）。地面の高低を描いていない他の絵巻に対して、中尾家本はなぜ、意識的に盛り上がった地面を描いたのであろうか。

この章段の「武蔵野は」の和歌は『古今集』春歌上の17番歌でもあるが、初句の「武蔵野」が『古今集』では「春日野」となっており異同が見られる。「古注」と呼ばれる類の注釈書は、この差異を解釈によって埋めようとした。以下に、冷泉家流伊勢物語古注（以下、冷泉家流古注とする）の中から、『冷泉家流伊勢物語抄』を引用する。

人の娘をぬすみて武蔵野へ行といふは、長良の中納言の大和守にてならに住ける時、二条の後のいまだ大裏へも参給はで、おやの許

におはしけるを、業平ぬすみて、春日のの中、
武蔵塚へ行をいふ也。

『伊勢物語』本文では「女」としか書かれていない女性を二条の後であるとするのは、冷泉家流古注をはじめ『和歌知頭集』などにも見られる説であり、中尾家本も女性に「二でうのきさき」と注記している（図2）。地名の異同については傍線部に言及があり、春日野の中に武蔵塚という場所があるとして両方の地名を取り入れている。傍線部の後には、武蔵国に骨を埋めたいと思っていた人物が春日野に埋葬されて祟りをなしたために、武蔵から運んだ土で墓を作ったことから武蔵塚と呼んだという話が引かれ、武蔵塚は盛土をした墓所の名だとわかる。同じく冷泉家流古注である『伊勢物語奥秘書』でも同じ説が語られた後に、「草むらの中とは、彼武蔵塚に女をかくし置なり」と武蔵塚に女を隠したと説明される。

以上のことから、中尾家本の盛り上がった地面は武蔵塚ではないかと考える。中尾家本の作者もこの章段の場を春日野の武蔵塚と理解しており、『伊勢物語奥秘書』が言うように二人が隠れたのは武蔵塚であると考えていたために、盛り上がった地面を描くことで武蔵塚を表現したのではないだろうか。

さらに、挿絵に描かれた草花について検討することで、この説を掘り下げてみたい。「小野家本伊勢物語絵巻」には菊や萩、桔梗といった秋の草花が見られるように（図1）、この章段の挿絵には多くの絵巻で秋の草花の姿が描かれている。それは、この物語の場が武蔵野と考えられていたからである。和歌において武蔵野を詠む際には、秋の情景を詠むのが伝統的であった。また、『とはずがたり』巻4の武蔵野の場面にも、「野の中をはるばると分けゆくに、萩、女郎花、萩、薄よりほかは、また混じる物もなく、これが高さは、馬に乗りたる男の見えぬほどなれば^{5）}」という一節が見られ、武蔵野には背が高い秋の植物が生い茂っているイメージがあったことがわかる。一方で、春日野は和歌では「若菜」や「霞」といった語と共に詠まれることが多く、春の季節のイメージがある。そのため、春日野と理解していれば秋の植物を描くことはない。中尾家本の挿絵には秋

の草花の姿はなく、描かれた草は身を隠せないほど低いものであることから、やはり春日野の武蔵塚に隠れる図様だと言える。そして、古注の中で「武蔵塚」の名を用いて説明するのは冷泉家流古注のみであることから、中尾家本の作者は冷泉家流古注の解釈に基づいてこの章段の挿絵を描いたと考えられる。片桐洋一氏は、中尾家本の注記が「物語の登場人物のすべてに実在人物の名をあてる『冷泉家流伊勢物語注』の類に依拠していると見て誤りない」と述べ⁶⁾、中尾家本の人名注記の内容が冷泉家流古注に基づくことを指摘したが、ここで新たに12段の挿絵においても冷泉家流古注との一致が見られたのである。

続いて挙げる23段も、中尾家本と冷泉家流古注の一致が見られる章段である。23段は「筒井筒」として有名であるが、冷泉家流古注との一致が見られるのは、話の終盤、男が高安の女のもとを訪れる場面である。

まれまれかの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のうつはものにもりけるを見て、心憂がりて、いかずなりにけり。(『伊勢物語』23段)

注釈書において問題とされたのは、傍線部「筒子のうつはものにもりける」の解釈であった。現代では「けこ」は「筒子」と表記され、「飯を盛る器」(新編日本古典文学全集)と理解されている。しかし、山本登朗氏が「江戸時代初期までのおもな注釈はすべて、『けこ(けご)』を『家子』すなわち一家眷属の者たちの意と捉えていると考えてよい」と述べているように⁷⁾、「けこ」は「家子」の意味で長らく理解されていた。

そして、現代では「筒子のうつはものにもりける」は高安の女が自分で飯を盛る様をいうと理解されるが、冷泉家流古注では「家子」と理解した上で高安の女の行動について異なる解釈がなされていた。以下に、冷泉家流古注の一つである『十卷本伊勢物語注』を引用する。

飯貝トリテモチケゴノ器ニ盛ルトハ、必、ワガモルニハ非ズ。懸養ノ物共ニ、ソノ宛物相節ヲ計宛義也。サレバ、必我ト飯ヲモル義ニハアラズ。(中略)サレバ、自ラ飯ヲモル

ニハアラネドモ、面々ノ食物ヲ計ヒ宛レバ、飯ヲモルト云。

波線部では、高安の女が自ら飯を盛ったとする現代の解釈は否定されている。傍線部の「懸養ノ物共ニ、ソノ宛物相節ヲ計宛義也」は、「養っている者たちに物を与え、配分をあれこれ考えて割り当てるという意味である」と解釈できる。つまり、高安の女は自ら飯を盛ったのではなく、召使いたちの飯の配分について横から口を出して取り仕切ったという理解である。同様の解釈は他の冷泉家流古注にも見られる。

それでは中尾家本はどう理解していたかという点、飯を盛っている女性ではなく、その右側にいる女性の側の柱に「たかやすの女」という注記が見られるのである(図3)。その高安の女は口に手を当てて何か言っているように見え、飯を盛っている人物の目線も高安の女のほうを向いている。さらに、手前の女性が持つ盆の上には既に飯を盛った器が三つ載せられ、何人もの飯が準備されている状況であることから、片桐氏が『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇』で「飯を盛り分けて、家子^{けこ}のもとへ運ぶ女たちを監督する高安の女⁸⁾」と説明する通り、高安の女は配分を取り仕切ったと理解されていた。したがって、23段のこの場面においても、中尾家本は冷泉家流古注に基づいた理解をしていたと言える。

続いて、冷泉家流古注に一致する章段として2段を挙げる。2段の内容は、雨が降る折に男が女に歌を送るというものである。

それをかのみめ男、うち物語らひて、かへり来て、いかが思ひけむ、時は三月のついたち、雨そほふるにやりける。

おきもせず寝もせで夜を明かしては春のものとながめくらしつ(『伊勢物語』2段)

ここでは、「雨そほふる」とはどのような雨かということが問題となる。冷泉家流古注の一つである『十卷本伊勢物語注』には、「雨ソホフルトハ、少ニハアラズ。シゲクフル雨也。添雨ト書リ」とあり、絶え間なく激しく降る雨と理解されていた。同じく冷泉家流古注である『冷泉家流伊勢物語抄』には、

雨そほふるといふは、少し降に非ず。^{ソツフル}添雨

とかけり、しげき雨なり。(中略)又或説とて、雨そほふるにやるとは、後朝の文なり。そほふるとは、しづかにふる也。細雨也。とあり、ここでも傍線部で「しげき雨なり」とされる一方、波線部では或説として、「しづかにふる」「細雨」であるとする正反対の理解が示される。そもそも「そほふる」は、『角川古語大辞典』⁹⁾では「細かな雨が降る。雨がしょぼしょぼ降る」と説明され、『冷泉家流伊勢物語抄』で「或説」として提示されたほうの意味なのである。調査した範囲では、島原松平文庫本系統の『伊勢物語知願集』(以下、松平文庫本系『和歌知願集』とする)など、この辞書の説明通り細雨のこととする注が多く、さらに時代が下ると「三月」という時期を踏まえて説明されるようになる。古注の次の時代である「旧注」に分類される『伊勢物語愚見抄』には、「そほふるは、そとふる雨をいへり。春の雨をば、詩にも細雨などつくれり」とあり、「そほふる」はそとふる雨で春の細雨のことと理解している。

そこで中尾家本を見ると、挿絵にははっきりと雨が描かれており、しかも激しい雨が降っているように見受けられる(図4)。中尾家本で他に雨を描いている章段としては6段の「芥河」があるが、6段の本文には「雨いたう降りければ」という文言があるため、中尾家本は本文に従い、激しい雨を描いていると考えられる(図5)。その激しい雨を描いた6段とこの2段は、どちらも黒い斜線で雨が描かれ、その雨の量までもが非常に似通っている。よって、中尾家本では2段の雨も激しい雨と解釈されていたと考えられる。調査範囲で「しげき雨」と理解する注は、初めに挙げた冷泉家流古注の『冷泉家流伊勢物語抄』と『十卷本伊勢物語注』のみであり、中尾家本の「そほふる」の理解はそれらと一致するものであった。

ここまで、中尾家本と冷泉家流古注の複数の書が一致する章段について述べてきたが、冷泉家流古注のうち一つの書とのみ一致する場合も見られる。それが次に挙げる96段である。これは、夏の暑い時期に「おでき」ができたために秋になってから逢おうと言ってきた女性がいたが、男との噂が立ったことで女の兄が迎えに来たため、逢え

なくなってしまったという話である。

秋まつころほひに、ここかしこより、その人のもとへいなむずなりとて、口舌いできにけり。さりければ、女の兄、にはかに迎へに来たり。さればこの女、かへでの初紅葉をひろはせて、歌をよみて、書きつけておこせたり。(『伊勢物語』96段)

中尾家本のこの場面の挿絵では、女の側に二人の男性が描かれている。片桐氏はその女性について「人名注記はないが、『冷泉家流伊勢物語注』では二条后とする。とすれば、廂と簀子にいる二人は、後の『せうと』、基経・国経ということになる」¹⁰⁾と述べ、二人の男は兄の基経と国経であるとする。この指摘通り、二人の男は迎えに来た女の兄と考えてよいであろうが、実は基経と国経の二人が迎えに来たという解釈は『伊勢物語奥秘書』にしか見られない。『伊勢物語奥秘書』には「さりければ、此女のせうと、俄にむかへにきたりとは、後の兄弟、基経、国経など、此くぜちを聞て、むかへに給ふなり」とあるが、他の冷泉家流古注は迎えに来た人物に基経のみを、『和歌知願集』の類と『伊勢物語宗印談』は国経のみを挙げる。本文が「女の兄」であって「兄たち」ではないため、どちらかのみが迎えに来たとする理解はもつともである。それにもかかわらず基経と国経の二人が迎えに来たと考えられたのは、同じように二人の兄が二条の後を迎えに来る6段の「芥河」と混同されたためであろうか。この章段においては、中尾家本は冷泉家流古注の中でも『伊勢物語奥秘書』とのみ一致が見られた。

ここまで、中尾家本が冷泉家流古注と一致する例について見てきたが、一部には冷泉家流古注以外の注釈書とも共通する内容を持つことを指摘しておかねばならない。それが「芥河」として有名な6段である。

ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいとみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡縵こまを負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつみたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。(『伊勢物語』6段)

この章段の絵画化において問題となるのが、本文傍線部の「あばらなる倉」である。この「あばらなる倉」は、『冷泉家流伊勢物語抄』では以下のように説明されている。

鬼ある所ともしらでとは、大内の鬼の間なり。后をうしなひて尋を聞て、鬼の間の有所をもしらで、おにの間の一の口にかくし奉るをいふなり。鬼の間とは、先帝の御具足取置て人おそれてゆかぬ所なるが故に、おにの間といふ。(中略)あばらなるくらに女をばおくにをし入てとは、彼鬼の間は、御具足をきたる蔵也。主のましまさねば、あばらなるといふ也。或は先みかどの供御所なり。鬼間に有。あばらは、供御の名也。是、実義なりと云々。

小峯和明氏が、芥河は「一般的には撰津のそれとされているが、中世の注釈の大半は宮中説をとっており、宮中に芥河という川があったと理解されていたとする通り¹¹⁾、「あばらなる倉」は宮中の中でも先帝の調度品を収めている鬼の間を指し、既に主がいないために「あばらなり」と言うとする。『十卷本伊勢物語注』も「アバラナル蔵ニトハ、先帝ノ御具足置タル蔵也。主マシマサネバ、アバラナルト云ン」とし、冷泉家流古注は同様の理解となっている。しかし、中尾家本では屋根の板が剥がれ、縁側の床板の一部も無くなった建物が描かれており(図5)、「あばらなる」を建物の外見のこととはしない冷泉家流古注の解釈とは異なっているのである。

ここで注目されるのが、同じく「あばらなり」という語が出てくる4段の『十卷本伊勢物語注』に見られる、「又、或義ニ云、アバラナル板敷トハ、スノコヲ云也」という注である。簀子とは「竹や木を間を少しづつ透かせて並べ、打ちつけたもの」(日本国語大辞典¹²⁾)である。この「あばらなる板敷とは簀子のことを言う」とする注が、中尾家本の図様につながっているとは考えられないだろうか。この説の基と考えられるのが、次の松平文庫本系『和歌知頭集』4段の注である。

問、(中略)いかなれば、西台^{にしのだい}のひめぎみ一人おはせばとて、台^{たい}のあばらになりけるぞや。これ、ふしんなり。

答、まことに、あれてあばらになりたる事はなし。台のやの縁などは、すのこじきとて、あつきくれのめんをとりて、あひ一すんばかりづゝあけて、つりどのゝすのこのやうにしたるなり。それを、なりひら、をのが心ざすあるじの女なくなりて、こぞにかはりてはんべるさびしさを、心のうちになげきて、あばらなるいたじきとはかきたるなり。心には、あれたるよしを、さしはさみたれども、上には、すのこじをいへるなり。

「台のや」は「寝殿造の住宅で、寝殿の東西や北に付属する建物」(角川古語大辞典)のことであり、そうした場所の縁側には「簀子敷」といって間を一寸程度ずつ空けて釣殿の簀子のように板を敷くという。なお、『住吉物語』下巻には「かの所は入り海なれば、池のやうにありける所に、釣殿を造りかけたれば、簀子の下に、魚などの行き違ふも見ゆ¹³⁾」という一文が見え、釣殿の床板は確かに簀子であったことが確認できる。そして、続く部分で「あばらなる板敷」には建物が「荒れた」という意味も込めてはいるが、実際は簀子敷のことを言うのだとする。また、書陵部本系『和歌知頭集』の6段にも以下のような注が見られる。

あばらなるくらとは、くにのちやうなり。かのくわんのちやうは、ごせち・だいじやうゑのぐそく、とりをきたるところなり。されば、くらといふ。かのくらは、ぬす人のをそれなどもなきがゆへに、あつくおほきなるきをくぎぬきのやうにきりくみてまをあけてつくり、となどもいたうきびしくせねば、あばらなるといふことばをくわへたるなり。

ここでもやはり「あばらなる倉」は冷泉家流古注と同様、調度品を置く場所とされる。そして、「あばらなる」という理由としては、大きな木を簡単な柵である釘貫門のように隙間を空けて組んであるためだとする。以上のように、『和歌知頭集』では「あばらなり」は隙間が空いていること、特に4段の「あばらなる板敷」は簀子のことと理解され、その『和歌知頭集』の注を『十卷本伊勢物語注』や『増纂伊勢物語抄』では「或義」として紹介していた。中尾家本はこの『十卷本伊勢物語注』や『増纂伊勢物語抄』の「或義」の注、元

を辿れば『和歌知顯集』の注から「あばらなり」は簀子のことであると理解したのだろう。ただし、こうした注に従うのであれば荒れた建物の様は描くべきではない。中尾家本の作者はそのあたりを曖昧に理解しており、簀子状に隙間が空いたのは倉が荒れてしまったからだと解釈したのではないだろうか。このように考えるのは、「あばらなり」を荒れたという意味だけで理解していたのならば、屋根や床板に限らず壁や建物の周辺にも荒れた様子が描かれそうなものだからである。ここで屋根と床板という板でできた部分にのみ荒れた様子が描かれているのは、やはりその根底に簀子という理解があったからであろう。なお、中尾家本は4段の挿絵でも同様に屋根と床板が剥がれた建物を描いており、一貫して「あばらなり」という語は同様に理解されていた。この章段においては中尾家本と『和歌知顯集』の類との一致が見られたが、その『和歌知顯集』の説は冷泉家流古注に「或義」として紹介されているため、中尾家本は直接的には冷泉家流古注のほうを参考にした可能性もあるだろう。

他に中尾家本が冷泉家流古注と異なる内容を描いた章段として、117段が挙げられる。これは住吉明神が帝の前に姿を現して返歌をするという話であり、その神秘的な内容からさまざまな秘伝的解釈が生まれてきた。この章段の中尾家本の挿絵では、社の簾の向こうに女性の姿で明神が描かれていることが注目される(図6)。片桐氏はこの女性を「住吉明神の女神『神功皇后』」であると、¹⁴⁾「中尾家本でしか見られない興味深いモチーフ」の一つに挙げている。他にこの章段を描いた「異本伊勢物語絵巻」では、住吉明神は老人の姿で描かれているが、これは「異本伊勢物語絵巻」の詞書本文に「おきなのみなりあしき、いできて」とあることによる。この詞書は、非定家本系統にのみ存在する、次の117段後半部をもとにしているとされる¹⁵⁾。

この事をきゝて、ありはらのなりひら、すみよしにまうでたりけるついでに、よみたりける。

すみよしのきしのみめまつひとならばい
くよかへしとはましものを

とよめるに、おきなのみなりあしき、いでて、めで、かへし、

ころもだにふたつありせばあかはだの山
にひとつはかさまし物を¹⁶⁾

次に中尾家本の神功皇后とされる女性姿の明神について検討する。まず、これまでに中尾家本との一致が多く見られた冷泉家流古注の一つである『冷泉家流伊勢物語抄』には、「御神げきやうしてワシカミとは、現形、又は下行とも巫カンナギに付て御返事有といへり」とあり、明神が巫女にのり移って返事をしたと理解されている。これは『十卷本伊勢物語注』や『増纂伊勢物語抄』も同様である。しかし、中尾家本では「すみよしおんかみ」と注記していることからこの人物は明神自身であり、冷泉家流古注の記述とは異なっていることになる。そこで、住吉明神が神功皇后の姿で現形するというこの解釈がどこから生まれたのかが問題となる。これに関して、久下裕利氏は「神功皇后の武勲や戦果と広本系後半部とを結びつけた解釈を示す」¹⁷⁾ものとして、片桐氏により二条家末流の輩の作と推定される¹⁸⁾『彰考館文庫本伊勢物語抄』を指摘している。その『彰考館文庫本伊勢物語抄』では、非定家本系統の後半部で住吉明神が詠んだ「ころもだに」の歌について、「たゞたゞこの哥は、神功皇后じむぐくほうごうの御哥也」「住吉の明神、神功皇后の御うたをおぼしめしいでてよみ給ひけり」とする。この歌は実は神功皇后が作ったもので、その歌を思い出して明神は詠んだというのである。このように、住吉明神と神功皇后を絡めた享受の仕方は確かに存在していた。ただし、この章段以外に『彰考館文庫本伊勢物語抄』のみが中尾家本と一致する章段は見られないため、両者の間の直接的な影響関係は考えにくい。したがって、住吉明神と神功皇后の関わりを伝える伝承や、そもそも神功皇后が住吉大社の第四本宮に祀られていることから生まれた挿絵であるとも考えられる。

以上のように、中尾家本は一部には冷泉家流古注以外の注釈書とのみ一致する内容もあるものの、強いつながりではないため、その挿絵は概ね冷泉家流古注に基づいて制作されたと考えて良いように思われる。

3. 注釈書と異なる中尾家本の特異な挿絵

2章では中尾家本の挿絵が主に冷泉家流古注に基づいて制作されたと結論づけたが、面白いことに、中尾家本はすべての章段において冷泉家流古注に拠るのではなく、中には作者が独自の理解で描いた挿絵も存在する。こうした点から、中尾家本は「今日、伝存する伊勢物語絵巻・絵本群の中で極めて特異な作品」と言われるわけであるが¹⁹⁾、この章ではそうした中尾家本の特異な挿絵について検討する。

まず、中尾家本の作者独自の理解が顕著に現れた章段として65段を挙げる。男（業平）は帝が心をかけている女（二条の後）と逢うようになり、女が止めるのにもかかわらず部屋を訪れ、女の里にまで通い続けるというのが前半の内容である。

むかし、おほやけ思してつかうたまふ女の、色ゆるされたるありけり。大御息所とていまずがりけるいここなりけり。殿上にさぶらひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひしりたりけり。男、女がたゆるされたりければ、女のある所に来てむかひをりければ、女、「いとかたはなり。身も亡びなむ、かくなせそ」といひければ、

思ふにはしのぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ

といひて、曹子におりたまへれば、例の、このみ曹子には、人の見るをもしらでのほりみければ、この女、思ひわびて里へゆく。されば、なにの、よきこと、と思ひて、いきかよひければ、みな人聞きて笑ひけり。つとめて主殿司の見るに、沓はとりて、奥になげ入れてのほりぬ。（『伊勢物語』65段）

中尾家本のこの章段の第1図は業平が二条の後の部屋にやって来る場面であるが、建物が2階建てのように描かれ、1階と2階にあたる部分がそれぞれ別の場面の挿絵となっている（図7）。このような絵画化は、中尾家本の中でもこの章段でしかなされていない。片桐氏はこの挿絵を、「同一の構図（同図）のうち、同じ人物の異なった時点（異時）での姿が写され」²⁰⁾異時同図法だと

している²¹⁾。しかし、異時同図法では一つの建物の同一平面上に別の時間の登場人物の姿を描くのが常套であり、中尾家本が建物自体の異時の姿を上下に分けて描いたとは考えにくい。例えば、先に挙げた6段の「芥河」にも異時同図法が用いられ、芥河のほりを歩く場面と女の兄が取り返しに来た場面が同一平面上に存在しているが、建物は一つであり2階建てのように描かれていない（図5）。したがって、確かに二条の后に対しては異時同図法が使われているものの、2階建ての建物が描かれた理由は他にあるのではないかと考える。

まず、この第1図に描かれた場面について検討しておく。上段は男女が向かい合って座っていることから、本文の傍線部「女のある所に来てむかひをりければ」を絵画化していると考えられる。そして下段は片桐氏の指摘通り、二重傍線部「曹子におりたまへれば」の絵画化である。ここで考えられるのが、作者は「曹子におりたまへれば」を「自室にお下がりになる」（新編日本古典文学全集）という意味ではなく、文字通り「下りる」という下への移動の意味で捉えていたのではないかとということである。下に移動する様を表現するためには、2階建ての建物を描かざるをえなかったのである。

さらに、続く第2図は業平が沓を持っていることから、本文波線部「沓はとりて、奥になげ入れてのほりぬ」を絵画化していると考えられる（図8）。『新編日本古典文学全集』では、男が沓を投げ入れたのは宿直したように見せかけ、二条の後の里へ行っていたことを隠すためだと理解される。しかし、中尾家本の挿絵では、「思ひわびて里へ」行っているはずの二条の後の姿が上段に描かれている。左下には「とのもづかさ」と注記された人物が描かれていることからこれは宮中を描いた図であり、二条の后がこの場にいるのはおかしいのである。だが、実はこのような理解も確かに存在していた。以下に、『冷泉家流伊勢物語抄』のこの部分の注を引用する。

つとめてとのもづかさの見るにといふは、内裏のまほり也。此は、^伴とのももの守ともよしを雄也。是が見るをはじて、くつをば御へや

の奥へなげ入て、後の御へやにかくれるをいふなり。

ここでは、後のもとを訪れていることを主殿司に知られることを恥じたために、沓を投げ入れて隠して後の部屋に籠もったと理解している。つまり、二条の後はいつの間にか里から戻ってきて宮中にいたのである。同様の理解は、『十卷本伊勢物語注』や『増纂伊勢物語抄』にも見られ、『伊勢物語愚見抄』も「中将、はきたる沓を手づからとりて、内へなげ入たる也。のぼるは、女の所へ入るをいふ也」とする。中尾家本もこれらと同様に、業平が沓を投げ入れて向かった場所は二条の後の部屋であると理解していたために、二条の后を描いたのであろう。なお、調査した範囲で、沓を投げ入れたのは宿直したように見せかけるためだという現代と同じ理解を示した注は『伊勢物語惟清抄』のみであった。

そして、第1図と同様にこの第2図でも2階建ての構図が採用されているのは、「おりる」を下へ移動することと理解したのと同様に、この「沓はとりて、奥になげ入れてのほりぬ」の「のぼる」も上へ移動することと理解したためだと考えられる。現に、業平が登って向かう先である二条の后は上段に描かれており、「登る」という言葉と一致しているのである。この「のぼる」を上下移動の意で理解した注は見られないが、『伊勢物語宗印談』では「のぼる」は上に移動することではないと否定する注があり、そうした誤解の可能性も大いにあったと考えられる。したがって、中尾家本の作者は「おりる」と「のぼる」については注釈書に拠らず、独自に上下移動の意味で理解していた。その結果、こうした特異な図様が生まれたのである。

さらに11段においても同様に、誤解に基づく絵画化が起きている。11段は、男が東国へ行った際に、友人たちに歌を送る話である。

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせける。

忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで（『伊勢物語』11段）

しかし、中尾家本の挿絵を見ると男と友人は同じ

場所におり、直接歌を詠みかけるような図様になっている（図9）。この章段の注釈を見ても直接友人と会ったという注は見つけられないばかりか、「佐馬頭忠基と云人の所へ、つかはずとあり」とする『伊勢物語奥秘書』のように、手紙を送るととっていることがわかる注もある。それでは、なぜ中尾家本ではこのような図様が描かれたのか。

その理由として、「旅の道」と理解すべき本文の「道」をそのまま「道路」のことと捉えた可能性が挙げられる。つまり、中尾家本の作者は歩いてその道から言ってよこしたと解釈したために、道の上で友人に向かって歌を詠みかける図様を描いたのである。このように考えると、友人が業平の前において業平の方を振り返っているのも、道の後方から歌を詠みかけられたからだと言える。そして、業平たちが立っている場所の手前と奥には平行な線で草が生えた道路脇が描かれ、業平と友人がいる場所はまさしく「道」であるように見える。結果として、東国にいるはずの業平が友人と同じ場所にいるという非現実的な図様となっているのだが、中尾家本の作者は「道」をそのまま道路のこととする以外の解釈を思いつけなかったのであろう。そのために、こうした特異な挿絵が生まれたと考えられる。先に挙げた65段では「おりる」や「のぼる」といった語を表面的に受け取り、上下移動を表す図様を描いたと結論づけたが、この章段においても同様に表面的な語の理解に基づく絵画化が起っていたのである。

こうした独自の理解で描かれた挿絵は他にもあり、『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇』でも指摘されているように、19段では「天雲」と理解すべきところを「雨雲」と捉え黒い雲で描いていたり、40段では追い出すという意味で理解すべき「追ひうつ」を鞭打つ姿で描いていたりする。こうした独自の理解は、作者が本文の語彙を表面的に受け取った結果生まれたものであり、結果として少々辻褄の合わない部分も出てくるのであるが、そうした点は無視されている。林進氏は中尾家本の作者について、「伊勢物語写本やその注釈書に詳しく、相当の古典教養を持つ逸名の絵師・書家である」と述べたが²²⁾、こうした点から中尾家本の作者はあまり古典に造詣が深い人物ではないよ

うに思われるのである。

4. 中尾家本の人名注記について

さらに、中尾家本の特徴である人名注記についても注釈書と比較し、その結果を表「中尾家本と注釈書の人名注記の比較」として資料編の最後に付した。この表は、中尾家本の人名注記の中から具体的な人名を記述しているもの、またその可能性のあるものを一覧にし、各注釈書で当てられた人名と比較したものである。その上で、中尾家本と一致する注釈書の記述には色を塗り、中尾家本と内容は似ているが一致しない部分がある記述は網掛けにした。なお、「業平」の人名注記はほとんどの章段に存在するため、特異な説を述べる121段以外は省いている。

この表から、中尾家本の人名注記は『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇』で指摘された通り、やはり冷泉家流古注と多く一致することがわかる。そして、冷泉家流古注と同程度一致した注釈書として、『伊勢物語宗印談』と『伊勢物語懐中抄』が挙げられる。この両者は具体的な人名を当てるといふ古注の注釈方法を用い、少なからず冷泉家流古注の影響を受けて成立したものであるため²³⁾、冷泉家流古注をもとにしている中尾家本とも多く一致することになったと考えられる。

ただし、冷泉家流古注とは一致していないにもかかわらず、他の注釈書との一致が見られた人名注記については検討しておかねばならない。具体的に挙げると、23段と121段が『伊勢物語宗印談』、95段が書陵部本系『和歌知顕集』とのみ一致した。まず、『伊勢物語宗印談』とのみ一致した、23段の「井筒の女」という人名については、山本氏が「『宗印談』には、『一むらすすき』や『井筒の女』といった言葉が用いられているが、これらの表現は伊勢物語の本文やその注釈書には見えず、謡曲『井筒』に用いられている用語なのである」と述べており²⁴⁾、両者が謡曲に拠った結果、偶然一致したとも考えられる。さらに、95段と121段は中尾家本の注記に頻出する「二条の后」の名を記すものであるため、こちらも偶然一致した可能性がある。現に、中尾家本の人名注記

の中で「二条の后」は全部で11回登場する一方、同じ后でも「染殿の后」は1回、業平の相手の女性として注釈書では頻出する「小野小町」は3回、「有常の娘」も「ありつねのむすめきやうだい」の1回しか現れない。中尾家本の作者は二条の后を業平の相手として、頻繁に持ち出していたのである。以上のような点から、中尾家本と『伊勢物語宗印談』や『伊勢物語懐中抄』との間に直接的な影響関係があったとは考えにくい。しかし、冷泉家流古注を基にする点が共通しているゆえに、両者とは比較的多くの注記が一致することとなったのであろう。

なお、19段では総称である「ごたち」を女の名前ととっているなど、『伊勢物語絵巻絵本大成研究篇』でも指摘された通り、中尾家本の注記には根拠がないままに恣意的な注を付けていると思われる箇所が見られる。こうした点からも、作者の教養が高いものでないことがうかがえるのである。

5. おわりに

以上、中尾家本は主に冷泉家流古注に基づく一方で、独自の理解をする章段もあること、そうした章段は作者が本文中の語彙を表面的に理解した結果生まれたことを明らかにした。林氏は、「鎌倉・室町期の伊勢物語の注釈書を参考にして、あるいはその種の勸物を書き込んだ室町期の伊勢物語写本をテキストにして」中尾家本が制作されたとしているが²⁵⁾、古注に従う章段とそうでない章段が併存していることから、林氏の言う後者のような写本が存在していたと考えられる。つまり、作者は写本に書かれた断片的な冷泉家流古注の理解に基づく一方で、注が付いていない部分は独自に解釈して中尾家本を作ったのである。

片桐氏は、中尾家本と人名注記においてかなりの一致が見られた『伊勢物語懐中抄』について、この書が古注的な内容を持っているのは初心者向けに書かれたからであり、「当時、初心者には古注を交えて講釈することが一般的であった。初心者向けの講釈は、古注によって、おもしろく、楽しく享受されていたのである」と述べている²⁶⁾。

この中尾家本も、室町時代後期という時代でありながら概ね冷泉家流古注に基づいて制作され、挿絵の中にはおかしみを感じさせるようなものも含んでいる。故に、中尾家本の作者が高い古典知識を有していたわけではないのはもちろん、その享受者も同様の層の人々だったのではないだろう。このことから、古典が高い教養を持つ人々だけではなく、幅広い人々に楽しまれていたことがうかがえる。その中で、物語を理解する上で役に立つ注記が書き込まれており、どこかおかしみと愛らしさを感じさせる画風である中尾家本は、一般

の人々にとっても親しみやすい伊勢物語絵本であったろう。

資料編

掲載した図はすべて羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成 資料篇』（角川学芸出版、2007）より転載した。図版の転載をご許可いただいた羽衣国際大学名誉教授の泉紀子氏に深謝申し上げる。



図1 小野家本伊勢物語絵巻 12段



図2 中尾家本伊勢物語絵本 12段



図3 中尾家本伊勢物語絵本 23段第3図

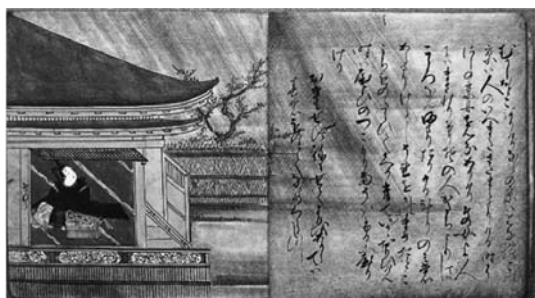


図4 中尾家本伊勢物語絵本 2段



図5 中尾家本伊勢物語絵本 6段



図6 中尾家本伊勢物語絵本 117 段

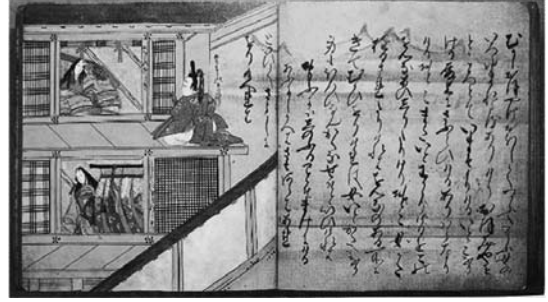


図7 中尾家本伊勢物語絵本 65 段第 1 図

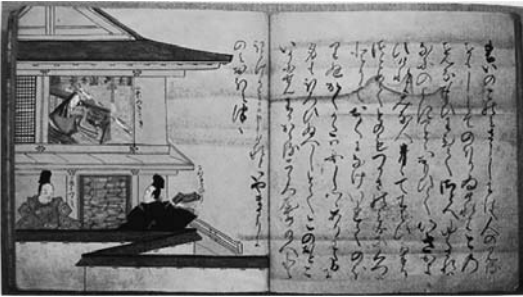


図8 中尾家本伊勢物語絵本 65 段第 2 図

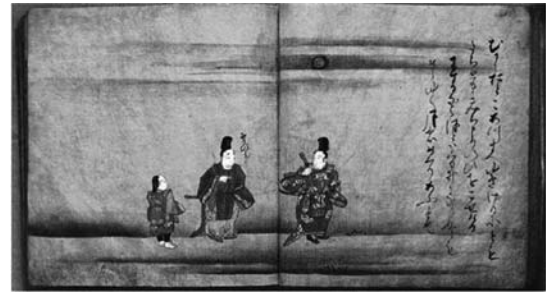


図9 中尾家本伊勢物語絵本 11 段

次の頁には、表「中尾家本と注釈書の人名注記の比較」を掲載している。なお、表中の記号の意味は以下の通りである。

- ・「—」…該当する記述なし 「×」…該当する章段自体がなし
- ・色つき…中尾家本と一致
- 網掛け…中尾家本と内容は似ているが一致しない部分がある
- 白色…不一致
- ・【牛】…各章段の注ではなく、書陵部本系統『和歌知願集』の巻第6「伊勢物語牛女共事」に注があることを指す。
- ・()…他の部分でなされた言い換え、補足、ルビ

中尾家本と注釈書の人名注記の比較

章段	中尾家本	人名に関わる伊勢物語本文	冷泉家流伊勢物語抄	十卷本伊勢物語注	増纂伊勢物語抄	伊勢物語奥秘書	書陵部本系和歌知願集
1	ありつねのむすめ きやうだい	—	紀有常が娘、春日の 里に姉妹ある	其(紀有常)娘姉妹	其(紀有常)娘姉妹	有常がむすめ兄弟	紀のありつねがむすめ
3	二でうのきさき	二条の後	二条の後	二条ノ后	二条の後	二条の後	二条后
6	二でうのきさき	二条の後	二条の後	二条ノ后	二条の後	二条の後	二条后【牛】
	くにつね	堀川の大入、太郎 国経の大納言	堀川のおとゝ太郎国 つねの大納言	堀河ノオトゝ太郎 国経ノ大納言	堀川のをゝ太郎 国経の大納言	堀川のをゝたらう くにつねの大納言	太郎国経の大納言 〔「神さへいとみじうなり」の 注部分〕
12	二でうのきさき	—	二条の後	二条ノ后	二条の後	二条の後	二条后
13	きさき	—	四条后	四条ノ后	四条后	四条后	后 二条后【牛】
14	きさき	—	二条の後	二条ノ后	二条后	二条の後	—
15	きさき	—	二条の後	彼后(二条の後)	彼后(二条の後)	二条の後	—
16	きのありつね	紀の有常	紀有常	有常	有常	きのありつね	きのありつね
17	きさき	—	有常が娘	有常方娘	有常が娘	有常が女	きのありつねが女
18	きさき	—	小野小町	小野小町	小野小町	小町	ありつねが女
19	ごたちといふ女	ごたちなりける人	—	有常之娘ノ阿子	有常が娘の阿子	有常が女	ありつねが女
21	こまち	—	小町	小野小町	小野小町	小町	ありつねが女【牛】
23	いづゝの女	—	有常が娘	有常方娘阿子	有常が娘阿子	有常がむすめ	—
	たかやすの女	—	丹波介佐伯忠雄が娘	其(丹波介佐伯ノ忠雄) が娘	其れ(丹波介佐伯ノ忠雄) が娘高安ノ女	佐伯の忠雄がむすめ 高安の女	—
27	きさき	—	二条后	二条后	二条の後	二条の後	五条后
28	こまち	—	小町	小野小町	小町	小町	小野小町【牛】
38	ありつね	紀の有常	紀有常	紀有常	紀有常	きの有つね	×
39	みなもとのいたる	瀬の至	瀬のいたる	瀬ノ致	致	瀬のいたる	—
41	なりひらのきさきの いもうとこ	女はらから二人	業平がつめの妹	(業平の妻の)妹	(業平の妻の)妹	中将の妻の妹	ありつねが女のいもうと【牛】
49	なりひらのいもうと	妹	業平妹なり、 初草の女也	業平ノ妹、初草ノ女	業平が妹、初草の女	此初草は、誠の妹にてはなし	×
52	二条のきさき(注の中)	—	これたか親王	惟高親王	惟喬親王	惟高親王 一説、二条后	行平中納言の女
62	ていし	—	小町	小町	小野小町	小町	ましこのまへ后宮の はらほ也【牛】
63	そめどの、きさき	—	三条町	三条ノ町	三条町	紀名虎がむすめ	小野小町
64	二ちうのきさき	—	二条后	二条后	二条の後	二条の後	染殿后【牛】
65	二ちうのきさき	大御息所とていま すがりけるいとこ	二条の後	二条后	二条の後	二条の後	二条后
	せいはいてんわう	水の尾の御時	清和天皇	清和天皇	清和天皇	清和	清和天皇
66	ゆきひら	あにおとと友だち	行平	行平	行平	行平	—
	ともひら	あにおとと友だち	仲平、もり平	仲平、守平	仲平、守平	仲平、守平、□	—
68	ともひら	—	行平	行平	行平	行平	×
69	いせのおんかみ	—	杉子	喚戸(ヨブコ)ノ前	喚戸(ヨヒト)の前	—(呼戸、帽子の名はあるがど ちらを指すかは明示されない)	大和守つきかげが女 (よひとのまへ)
71	すきこと申をんな*	すきごとひける 女	杉子	杉子	帽子	す(好)きごとひける女	すきこといふ女 斎宮也【牛】
76	二条のきさき	二条の後	二条后	二条后	二条の後	二条の後	×
77	つねゆき	藤原の常行	経行	恒行	恒行	常行	—
	さだいじん	—	西三条左大臣良相	西三条ノ大臣良相	西三条左大臣良相	忠仁公の御弟良相	西三条左大臣良相
78	これたかきやう	—	人やすの親王	仁康親王	人康親王	人康親王	—
82	これたかのきやう	惟喬の親王	惟高親王	惟喬親王	惟喬親王	これたかのみこ	—
	きのありつね	紀の有常	有常	有常	有常	有常	ありつね
83	これたかのきやう	惟喬の親王	惟高親王	惟喬	惟喬	惟高の親王	—
85	これたかのきやう	親王	惟高親王	惟喬親王	業平、定文、有常、周防 守隆盛入道、從三位清経 入道、式部大輔師重入道	惟高親王	—
87	ゆきひら	—	行平	行平	行平	行平	行平
	ともひら	—	—	—	—	—	—
90	二条のきさき	—	染殿后	染殿ノ后	染殿后	染殿の後	染殿后【牛】
95	にちうのきさき	—	伊勢 有常が娘	有常が娘	有常が娘	有常がむすめ一説には、 染殿の内侍又一義に、伊勢	二条后【牛】
97	つちみかど	堀河のおほいまう ちぎみ	堀川関白昭宣公 左大臣基経	堀川ノ関白、昭宣公、 基経	堀川の関白、昭宣公基経	右大臣基経昭宣公	×
99	こまち	—	染殿内侍	染殿ノ内侍	染殿内侍	染殿内侍	うつく【牛】
100	二ちうのきさき	—	染殿后	染殿ノ后	染殿后	二条の後	二条后、或説には五条后也。
101	ゆきひら	在原の行平	在原行平	行平	行平	行平	×
103	きさき	—	伊勢 或有常娘 或小町	小町	小町	小町	そめどの、后【牛】
107	ふちわらのとしゆき	藤原の敏行	藤原敏行	藤原敏行	藤原敏行	藤原の敏行	—
	いふと	—	業平の妹初草の女	業平ノ妹、初草ノ女	業平の妹、初草女	中將の妹、初草の女	ありつねが女、業平のこじうとめ ありつねが女いもうと也。【牛】
114	にんわのみかど	仁和の帝	仁和の御門	仁和ノ御門	仁和の御門	仁和のみかど	仁和の御門
	ゆきひら	—	行平、高経、滋春	行平、高経、滋春	行平、高経、滋春	行平、高経、滋春	行平の申納言
119	きさき	—	二条后	二条ノ后	二条の後	染殿内侍	×
121	なりひら	—	左京大夫源ノ致	左京大夫源致	左京大夫源致	源の致	×
	二条のきさき	—	—	—	—	染殿の兵衛	×
123	きさき	—	二条后	二条后	二条后	二条の後 他本の説に云、女は小町	いもうと也【牛】

※「すき事」と「杉子」どちらで解釈しているか不明なため、濁点は付けていない、書陵部本系「和歌知願集」、伊勢物語惟清抄も同様。

松平文庫本系 和歌短歌集	彰考館本伊勢物語抄	伊勢物語愚見抄	伊勢物語首聞抄	伊勢物語山口記	伊勢物語惟清抄	伊勢物語宗印談	伊勢物語樓中抄
きのありつねがむすめ	×	或説に、これは紀有常がむすめ二人	誰ともなし古注には(中略)有常女	—	有常ガ女兄弟アル事ヲ云ト也。用ベカラズ	紀有常と云者のむすめ	ありつねのむすめ
二でうのきさき	×	二条の後	二条后	二条后	二条ノ后	二条の後	二条の後
二でうの(の)きさき	×	二条の後	二条后	二条后	二条后	二条の後	二条の後
ほりかは大臣基経、 大なごん太郎くにつね	×	ほり河のおとゝ、たらうくにつねの大納言	ほり川のおとゝ、太郎国経	—	堀河ノオトゝ 太郎国経	堀河のおとゝ 太郎国経の大納言	おとゝ 大納言
×	×	—	誰ともなし	—	—	有常が娘	長良の御の御むすめ
×	×	—	誰ともなし 古注、四条后	—	—	四条の後	四条の後
×	×	—	誰ともなし	—	—	小町	—
×	×	—	—	—	—	二条の後	—
×	×	きのありつね	紀有常	有常	紀ノ有常	紀の有常	記の在常
ありつねがむすめ	×	—	誰ともなし	—	—	—	有常むすめ
紀のありつねがむすめ	×	—	小町	小町	小町	小町	小町
ありつねがむすめ	×	紀有常が女	染殿后の内などの女共の中にてもや	有常が女のよし、「古今」にみゆ	染殿后ノ召仕ハル、女	二条の後	記のありつねのむすめ
ありつねがむすめ	×	—	誰ともなし又、小町などにもや	—	—	深草の女	小町
—	×	—	有常女	—	紀有常ガ女	井筒の女	記の有常のむすめ
—	×	たかやすの女	—	たかやすの女	—	河内の女 こいたやの女	河内女
五でうのきさき	×	—	誰ともなし	—	—	伊勢	二条の後
—	×	小野小町	誰ともなし	—	—	小町	小町
×	×	きのありつね	紀有常	有常	紀ノ有常	紀の有つね	紀の有常
みなものゝいたる	×	源ノ至	源致	源のいたる	源ノイタル	ふかきのいたる	源のいたる
(業平の妻の)いもうと	×	—	—	業平の家に置給へる女といもうと	—	(業平の妻の)妹	旧妻のいもうと
いもうと	×	中将の妹	業平のいもうと	いもうと	業平ノ妹	いもと若草	此いもふとは、初草と云
さたかずしんわうの御母	×	—	—	—	—	二条の後	二条の後
×	×	—	誰ともなし	【古注】に、小町を業平のいへるとかける、みぐるしき事也	—	小町	小町
をの、こまち	×	—	—	—	—	小町	これたかのみこの御母、文徳天皇の後
×	×	—	—	—	—	—	二条の後
二でうのきさき	×	藤原直子	二条后	二条后	—	二条后	二条の後
せいわたんわう	×	清和の御門	清和御門	—	清和天皇	文徳天皇	清和天皇
—	×	行平	行平	行平	—	行平	行平
—	×	守平、仲平	守平、仲平	—	—	有常	業(ママ)平
×	×	—	—	—	—	—	行平
ふちはらの継蔭がむすめ(よひとのまへ)	×	—	—	—	—	伊勢	よ人のまへ
すき事いひける女	×	すきずきしき事をいふ	数寄事也	ほのすきたる	スキコトイヒケル女	すぎこ	すぎこ
×	×	二条の後	二条后	二条后	二條ノ后	二条の後	二条の後
—	—	藤原常行	—	常行	常行	藤原のつねゆき	常行
西三条左大臣良相 仁康のしんわう これたかしんわう	×	右大臣良相 人康(虫損) これたかの御子	西三条右大臣 人康親王 惟喬親王	西三条右大臣良相 — 惟喬のみこ	— 人康親王 惟喬	— 清和の太子 これたかの親王	— 仁明わうじ これたかのみこ
—	—	有常	有常	有常	有常	有常	有常
×	これたかの御子	文徳の第一の御子	惟高	惟高親王	コレタカノミコ	これたかのみこ	これたかのみこ
×	惟喬の御子	惟喬親王	惟高	みこの御方	惟喬	一のみや	これたか
ゆきひら	行平	行平	行平	行平	行平	行平	行平
—	—	—	—	—	—	—	—
×	弁御息所	—	—	—	—	二条の後	二条の後
×	潔子	—	—	—	—	伊勢	有常のむすめ
×	関白大臣昭宣公	昭宣公藤(ママ)基経	昭宣公基経	堀川のおとゝ	昭宣公基経	—	せうせん公
大なごん源昇卿のむすめ、龍	二条の後	—	—	—	—	染殿の後	斎宮
×	二条后	二条の御やす所	誰ともなし	—	—	染殿の後	二条の後
×	行平	在原ゆきひら	行平	行平	行平	行平	在原の行平
そめどの、きさき	有常が養子花子(桓武天皇御子)	—	—	—	—	—	小町
—	藤原のしげゆき	藤原のとしゆき	敏行	とし行	敏行	藤原のとしゆき	藤原のとしゆき
—	紀の有常が三のむすめ	業平中将のもの女也、初草の妹といふ説もあり	業平のいもうと也、初草の歌よみし女也	業平のいもうと	業平ノ妹也 ハツ草ノ返寄セシ人也	初草と云いものとあるとぞ	中将のいもふと初草
にんわの御かど	—	仁和のみかど	仁和の御門	—	仁和ノミカド	仁和の御門	仁和の御門
ゆきひらちうなごん	—	行平中納言	行平	行平	行平	行平	行平
×	たかこ(高子)	—	—	—	—	—	后
×	ありつねがむすめ、潔子	—	誰にても、業平の友なるべし	—	—	中将	みなものとしゆん
×	むめつほより二条のきさきの御ごうしへ	—	—	—	—	二条の後	二条の後
×	五条のきさき、したがふこ(順子)	—	誰ともなし古注に、二条后	—	—	小町	二条の後

注

- 1) 羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻 絵本大成 資料篇・研究篇』(角川学芸出版, 2007) 所収の「中尾家本伊勢物語絵本」を用いた。なお, 本論文で言及している他の絵巻, 絵本はすべて同書を参照した。
- 2) 石川透『『伊勢物語』における奈良絵本・絵巻』(山本登朗・ジョシユア・モストウ編『伊勢物語 創造と変容』(研究叢書 388) 和泉書院, 2009)
- 3) 比較に用いた注釈書を以下に示す。『冷泉家流伊勢物語抄』(彰考館文庫本伊勢物語抄)(片桐洋一『伊勢物語の研究 資料編』明治書院, 1981), 『十卷本伊勢物語注』(増纂伊勢物語抄『伊勢物語 語典秘書』(片桐洋一・山本登朗編『伊勢物語古注釈大成』第1巻, 笠間書院, 2004), 『和歌知頭集 書陵部本系統』(伊勢物語知頭集 島原松平文庫本系統)(同書第2巻, 笠間書院, 2005), 『伊勢物語愚見抄』(伊勢物語肖聞抄 文明九年本・宗長注書入』(伊勢物語山口記)(同書第3巻, 笠間書院, 2008), 『伊勢物語惟清抄』(伊勢物語宗印談)(同書第4巻, 笠間書院, 2009), 『伊勢物語懐中抄』(片桐洋一編『伊勢物語古注釈書コレクション』第1巻, 和泉書院, 1999)。なお, 清濁の区別を付けずに翻刻されている場合は, 独自に濁点を施して引用した。
- 4) 本論文中に引用している『伊勢物語』の本文はすべて, 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子『新編日本古典文学全集 12 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(小学館, 2014) に拠った。
- 5) 久保田淳『新編日本古典文学全集 47 建礼門院 右京大夫集・とはずがたり』小学館, 1999
- 6) 羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻 絵本大成 研究篇』角川学芸出版, 2007
- 7) 山本登朗『伊勢物語の生成と展開』笠間書院, 2017
- 8) 前掲注6に同じ
- 9) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』角川書店, 1982~1999 (以下, 『角川古語大辞典』はこれと同じものを使用した)
- 10) 前掲注6に同じ
- 11) 小峯和明『『伊勢物語』の注釈と言説世界』(山本登朗編『伊勢物語 享受の展開』(伊勢物語 成立と享受②) 竹林舎, 2010)
- 12) 『日本国語大辞典 第二版』小学館, 2000~2002 (以下, 『日本国語大辞典』はこれと同じものを使用した)
- 13) 三角洋一・石埜敬子『新編日本古典文学全集 39 住吉物語・とりかへばや物語』小学館, 2002
- 14) 前掲注6に同じ
- 15) 前掲注6に同じ
- 16) 前掲注6に同じ
- 17) 久下裕利『『異本伊勢物語絵巻』を読む 一 住吉 明神現形の意図とその絵姿一』(中野幸一編『平安文学の交響 一 享受・摂取・翻訳一』勉誠出版, 2012)
- 18) 片桐洋一『伊勢物語の研究 資料編』明治書院, 1981
- 19) 前掲注6に同じ
- 20) 榊原悟『すぐわかる絵巻の見かた 改訂版』東京美術, 2012
- 21) 前掲注6に同じ
- 22) 前掲注6に同じ
- 23) 片桐洋一・山本登朗編『伊勢物語古注釈大成』第4巻(笠間書院, 2009)や片桐洋一編『伊勢物語古注釈書コレクション』第1巻(和泉書院, 1999)の解題を参照した。
- 24) 山本登朗『古注釈とその周縁 一 伊勢物語の内と外一』(人間文化研究機構 国文学研究資料館 普及・連携活動事業部編『展開する伊勢物語』人間文化研究機構 国文学研究資料館, 2006)
- 25) 前掲注6に同じ
- 26) 片桐洋一編『伊勢物語古注釈書コレクション』第1巻, 和泉書院, 1999

Enjoying Ise Monogatari in Nakaoke Bon Ise Monogatari Ehon

Haruhi MUTO

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary *Ise Monogatari* has been illustrated in a number of picture scrolls, however, most of these scrolls only depict a select number of scenes from the story. *Nakaoke Bon Ise Monogatari Ehon* (referred to below as *Nakaoke Bon*) produced in the late *Muromachi* period contains almost all of the illustrations from all 125 chapters of *Ise Monogatari*, and has short sidenotes in each illustration. These features provide important clues that clarify how the author of *Nakaoke Bon* understood the story. Therefore, this study compared the illustrations and the sidenotes in *Nakaoke Bon* with 13 different commentaries of *Ise Monogatari*. It was found *Nakaoke Bon* were most similar to the commentaries of *Reizenke Ryu*, even in chapters that were not pointed out in previous studies. On the other hand, *Nakaoke Bon* has chapters that show different interpretations of the story from the commentaries. This could be due to the author's superficial interpretation of the text. So, he was not a person with a high level of understanding of classical literature.

In this way, *Nakaoke Bon* has both chapters that are based on its commentaries and those which are original interpretations. This could be because the author drew pictures referring to the notes written in manuscript of *Ise Monogatari* that he had on hand, while he drew his own interpretations of the text for the chapters on which he had no notes.